

# 孤高のプリマドンナ

馱蛇

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

出生、名前、記憶、そのすべてが欠落した名もなき少女は数奇な出会いを果たしたのち、月の世界で一人の舞姫に出会う。

|||||

やっぱりCCCのメルトが書きたい！という欲望に負けて見切り発車で始めました。  
気が向いたらなのでかなり不定期更新となります。

# 目次

第一幕：若者と死	1
第二幕：明るい小川	25
第三幕：風変わりな店	43



# 第一幕：若者と死

気付けば、私は落ちていた。

何も無い暗黒とも言える空間を、ただ終わりのない永遠を。

落下おちて――

墮落おちて――

退化おちて――

最早身体の動かし方、声の出し方、瞼の動かし方。そのすべてを忘れてしまった。そもそも自分の身体がどんなものだったかすら思い出すことができない。

いや、最初から自分という存在はいなかったのかもしれない。

何も持たない自分が、何物でもない存在デイクタに還る。何ら不思議ではないことだ。

そう、これが普通のことなのだ。

……。

……。

……。

いや、ダメだ！ それだけは嫌だ！

自分がなぜここにいるのか、自分が誰なのかわからない。でも、このまま消えていくのだけは耐えられない！

——返して！

そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

何を返して欲しいのか、何を失ったのかわからない。それでも何かを求めている自分がいるのは確かだ。

ならばこのまま消えるわけにはいかない！

「驚いた、こんなところに人が来るなんて……」

声が、聞こえた。すでに退化して、あることすら忘れていた耳が、何時間、いや何日、いや何年振りかの声を聞き取った。

声からして男性……いや女性？

どちらにも聞こえる不思議な声だが、とても穏やかで優しい。

「迷子……はさすがに違うね。」

うっかり表の切れ目から落っこちたのかな。何にしてもそこは危険だ。

もう少し落ちると彼が眠る場所に辿り着く。そうなれば侵入者扱いの君はすぐに殺される」

彼、というのが誰を指すのかわからないが、声の主がこちらを心配してくれているの

は伝わって来る。

しかしこちらとしてはどうすることもできない。

「手を伸ばして。」

掴む動作、意思を示してくれれば、僕の方から君を拾い上げられる」

言われた通りに腕を伸ばそうとする。

全く力が入らず、そもそも自分の腕があるのかすら実感がわからないが、この暗闇に差し伸べられるであろう救いの手を求めて。

「上出来だ」

空間が……割れる。

まるでガラスのようにヒビが入り、どこまでも続く闇の空間が一変し、見渡す限りの緑豊かな草原が広がっていた。

その光景を目の当たりにした瞬間、直感でわかった。ここは特異点だ。本来なら絶対に繋がることのない領域なのだ。

そんな空間に立つ一人の人間。ぱつと見女性かと思つたが、男性のような雰囲気もある。服もゆつたりと全身を覆うもので、身体のラインがはつきりしないのも相まって、どこまでも中性的な姿をした『彼』がこちらに微笑みかけていた。

「よかった、ちゃんと拾い上げられた」

その口から発せられる声も先ほどの空間で聞いたものと同じものだ。

「でもまだ危険な状態だ。」

随分とあの空間にいたからか、身体の形が曖昧だ。今は大丈夫かもしれないけど、さすがにそのままでは自己消滅してしまうかもしれない」

『彼』が言っている意味はわからなかったが、その柔らかな物腰に自然とこちらも無防備になってしまう。

「自分の名前は思い出せる？」

名前……わからない。

ただ断片的には思い出せる。

「……………!?!?!」

声が、出ない……………!

声帯の動かし方さえ忘れてしまったらしい。

「落ち着いて。ゆっくりで大丈夫だよ」

『彼』の言葉になだめられ、一文字ずつ発音する。

——く

ちゃんと声になっているのかわからないが、精一杯の力を込めて……

——し



元の名の順番など関係なく、思い出した文字を一つ一つ紡いで……

——は

散らばったパズルのピースを集めて並べていくように……

——み、な

……………それもこれが限界。

言葉が浮かんでこない。どうやらこの先の文字は散らばっているのではなく失っているようで、どうしようと戻らない。

黙り込んでいると状況を察した『彼』は顎に手を当てて考え始めた。

「くしはみな……」

発音と文字の羅列からして東洋の名前だね。

名前には詳しくはないけど、完全な名前ではなさそうだし、きちんと思い出せないのかな」

「……………」

まだ満足に声は出せないが、頷くことで肯定する。

「なら、こういうのはどうかかな」

そういうと『彼』はもう片方の手を動かす。

それにつられるように地面の草木が蠢き、みるみるうちにそれらは文字の形を成す。

「くしはみなと櫛波湊人。」

東洋の象形文字……漢字だったかな。

僕もさすがに全ての文字の意味はわからないから、さっきの君の名前に該当する読み方の漢字を検索して当てはめることしか出来ないけど……」

『彼』の指が人という文字を指す。

「この一番右の文字。」

これは『人間』を指す文字らしいね。

君を形作る最も重要な文字だから加えてみたよ。急造品ではあるけど、ひとまずこの名前でどうだろうか？」

………ああ。

『彼』はこれを急造品という。しかしこれほど嬉しいものはない。

パキパキと自分の身体が音を立てる。まるで蛹から成虫が出る準備をするように。この名前を起点に、自分が確固たる『人』として形作られていくのを実感した。

そして、ようやく『自分』を観測する。視界に映る脱色したように白色の髪の毛、腕は細く、茶色を基調とした制服に身を包んでいる。スカートを履いていることと、多少なりとも膨らんだ胸部を見て、自分の性別が女だったのだと理解した。

「あり、ありがとう」

得体の知れない自分にここまでしてくれてのだからせめてお礼を言わなければと改めて『彼』と向き合う。

人の形は成しているが声帯の方は完全に退化しているらしい。とりあえず声は出るのが我ながらかなりたどたどしい。それでも『彼』は優しく微笑んでくれる。

「どういたしまして。ようやく君の顔を見ることができたよ、ミナト。

それで、気分はどうだい？」

「たぶん、大丈夫」

今のところ軽く身体を動かす程度の確認しかできないが、声が出しづらいこと以外は特に違和感などはない。

ただ、満たされた心の中に未だにシコリのように一つの感情が残っている。

「でも、頭の中に、『返して』って言葉が、ずっと……ゲホッゴホッ!」

「落ち着いて。君が思っている以上に君の身体は衰弱している。普通に声を出すだけでもかなり無理をしているみたいだ。僕はちゃんと聞いているから、ゆっくりでいいよ」

その心遣いに甘えて、一言ずつゆっくりと自分の中にある言葉を声にする。

自分の中に『返して』という声がずっと響いていること。何を返してほしいのか、何を失ったのか、それすらも思い出せないが、たしかに何かを返してほしいと願っていること。

かなり時間がかかったし、口に出してみても曖昧なままだというのに目の前の『彼』は領き、そして真剣に対応してくれる。

「いろいろと欠落したみたいだし、返してほしい物に関する記憶を失っているのかもしれないね。

でも困ったな。手伝いたい気持ちは山々だけど、君たちがいる世界へ必要以上に僕が干渉するとどんな不具合が起きるか予測できないし……」

しばし思索した後、何かを思いついたらしく『彼』はおもむろにこちらの手首を掴んだ。

次の瞬間、『彼』の手が植物の蔦となって私の手首に巻きつき、ブレスレットの形に形成された。

「……………」

「僕の力の一部を礼装として落とし込んでみたよ。遠見の魔術として機能するはずだから、君の探し物の手助けになると思う」

たしかに、意識を集中させると視野が広くなり、この空間内のどこに何があるのかわかると頭の流れ込んでくる感覚がある。未だ何を求めているのかわからないが、闇雲に探すことは避けられそう。

でも、どうして『彼』はここまでしてくれるのだろうか？

「……これじゃあ不服かな？」

「っ！ ……っ！！」

あらぬ誤解を生みかけたので慌てて首を横に降る。

「どう、して……私を、手助けして、くれるの？」

「ああ、そういうことか。」

僕がこの姿になるきっかけになったある人が、今みたいにいると手を施してくれただ。ここに来れたということは君と僕には何かしらの縁があるようだし、せつかくだから今度は僕がその真似をしてみただけだよ。

あとは……」

『彼』は少し悲しそうに、しかし懐かしそうに顔を綻ばせる。

「僕たちはよく似ているから、かな」

「似て、る？」

その言葉の意味を尋ねようとしたところで、突如として緑が生い茂る空間に亀裂が走った。亀裂は止まることなく広がり、そこにあった空間がガラスのように割れる。割れた隙間の奥からは得体の知れない漆黒の闇がこちらを覗き込み、そしてその闇はブラックホールのごとく周囲の草木や空気までもを飲み込んでいく。

「いけない。騙し騙し長引かせてみたけど限界だ。この空間はもうすぐ崩壊する。」

「ミナト、手を。君が元いた世界の手前までは僕が責任を持つて送り届け——」  
伸ばされた手を掴んだその瞬間、『彼』の腕を両断するように目の前の空間が割れ、なす術なくその裂け目な吸い込まれてしまった。

どこか遠くから、先ほどの優しい声が切羽詰まった様子で呼びかけてくれる。

「ミナト、必ず僕が迎えに行く。だから持ち堪えるんだ——」

その言葉を最後に、私の身体は再び闇の中へと放り出された。

ぼんやりとした意識がだんだんと鮮明になっていく。起床時特有の気だるさを感じながら重い瞼を開けると、『彼』のいた草木に囲まれた自然豊かな景色とは一変。霧に包まれた石畳やレンガの建造物に囲まれた近代的な街並みが広がっていた。

直接見たことはないが、知識として記憶している景色としては19世紀のイギリスのそれに近い気がする。

「空気が、ひどい……」

どうやら空気まで再現しているらしい。本当に19世紀のイギリスにタイムスリッ プした可能性もよぎるが、おそらく違うのだろう。

「SE. RA. PH. これが月……ムーンセルの中に作られた世界？」

おぼろげながらも覚えている知識は確かにそうだと言っているが、にわかには信じら

れない。

魔術師から派生したウイザードと呼ばれるハッカーがいることも、過去の英雄をサーヴァントと言う使い魔として使役して、万能の願望機を得るための殺し合い……聖杯戦争が行われていることも。すべて実感がわかない。

はつきりと覚えているのは学生として何ら変わりない生活を送っていたことぐらいだ。

だが、意識を失つても手放さなかった『彼』の右腕が、この不思議な出来事が夢ではないことを証明しているような気がした。

(そういうえば、名前聞けなかったな……)

持つていても仕方ないかもしれないが、むやみに捨てる気も起こらず、とりあえずそのまま抱えた状態で行動に移る。

まずは誰かに合わないことには話は始まらないのだ。未だ声帯が衰えているため、誰かに会ったときにスムーズに話せるように発声練習でもしておきたかったが、この環境では逆に喉を傷めてしまいそうだから我慢しよう。

『彼』から貰ったブレスレットのお陰で少し進んだ先に何か動く気配が集団でいることがわかつているのは不幸中の幸いだ。

煙とすすが混じった霧に包まれた街を進むこと数十分、入り組んだ道に迷いながらも

ようやくブレスレットの力で知覚した気配がかなり近くなってきた。

あとは目の前の曲がり角を越えればすぐそこだ。そうとわかった瞬間無意識に走り出した。『彼』のブレスレットがあるおかげで孤独でないと自分に言い聞かせる事はできたが、やはり一人ぼっちで行動するというのは自分が思う以上に精神的に堪えていたらしい。

櫛波湊人という人格がはつきりしてからここまで、『彼』以外に誰にも会わなかったのも合わさって高鳴る鼓動を抑え切れず、足早に曲がり角を曲がりその先を覗き込んだ。

「あ、あの……………え？」

確かにそこには自分以外の存在がいた。ただし人ではない。右手に両刃の片手剣を携え、甲冑のようなものを纏った人形が佇んでいた。

冷静に考えると、動く気配とまではわかつていたがそれが人であるかどうかはわかっていなかった。だが後悔してももう遅い。

自分の中の記憶が全身へ警笛を鳴らす。

——あれは危険な存在だ、と。

すでに鎧人形たちにこちらの存在はバレ、剣を構えて戦闘態勢を取っている。

「あ、あああああああああああああつ!!」

気づけばなりふり構わずに鎧人形に背を向けて走り出していた。



後方からガシャガシャと金属同士がぶつかると音が追ってくる。なぜこんなところにあのような鎧人形がいるのかはわからない。だが、追いつかれれば死が待っているという事だけは容易に想像できた。故に走り続ける。

幸いここは入り組んだ道が続く街の中。ここを最大限に利用すれば逃げ切れないこともないはずだ。

心の抛り所として『彼』の右腕を握りしめて曲がり角を右へ左へ、自分でも混乱するほどランダムに逃げ続ける。今自分がどこにいるのかプレスレットに意識を集中して把握する暇もないが、次第に追っ手の音が遠のいていくのは感じ取れた。

だが、一つ大切なことを失念していた。

入り組んでいる道は巡り巡って元来た道に繋がっていることがあることを、そしてそこを進む方向を統一せず移動すればいずれどういう結果を生むのかを……

「——あ」

このままいけば逃げ切れるという気のゆるみもあつただろう。狭い路地を抜け大通りに出た先で、例の鎧人形と鉢合わせをする形となった。どうやら知らず知らずのうち迂回するコースを走っていたらしい。

思わぬところで対面することになると、先に鎧人形の方が動き、その手に握る片手剣を容赦なく振り下ろす。とつさに地面を転がることで避けられたが二度目はないだろ

う。

「はっ、はっ、は……は……く、逃げ——」

石畳に舗装された道から外れ、霧などの水分で濡れた草木が生い茂る地面で全身を泥だらけになりながら次の攻撃に警戒して体勢を立て直そうとしたそのとき、空から新たな人影が降ってきた。

シルエットからして女性。いや少女か。そしてまず目に入ったのは地面につきそうなほど長く、このような悪環境でも関係なく鮮やかに輝く薄紫色の髪。続いて特徴的なのは両足の脚具。全体的にはハイヒールのような造形となっているが、その細部は剣や棘といった鋭利な凶器が備わっている。そして最後に目に入った……というより少し現実逃避をして見ないふりをしていた服装にはそれまでの特徴が弱く感じるほどの衝撃を与えられた。

上は袖の長いコートのようなものだが腹部が全然隠せていないというか隠す気がない。そしてなにより、下は秘部だけを隠すプロテクターのみというところでもない服装だった。

情報量が多すぎて鎧人形がその少女の下敷きとなりあっさりと倒されたということに気づくのに遅れてしまった。

「あら、下にエネミーがいたのね。ごめんあそばせ？」

優雅に、しかし嗜虐的な表情で歌うように少女の口から言葉が紡がれる。それだけで容易に理解できた。

彼女は『狩る側』の人間だ。彼女の前では私のような存在は彼女の欲望を満たすための遊び道具でしかない。それほどまでの絶対強者。

エネミーと称された鎧人形を道端の石ころのごとく蹴り飛ばした少女は、そこでようやくこちらの存在に気付いた。

「驚いたわ。まさかこんなところに人間が——」

狩る側に見つかってしまった哀れな弱者に向ける表情が揺らいだ。

「そんな……嘘。まさか……いえ、そんなはずは……たしかにあの時ちゃんとドレインしたはず……」

見下すような視線が驚愕に変わり、何やら小さく呟いている。

これは逃げるチャンスだろうか……？ できる限り相手を刺激しないようゆっくりと立ち上がろうと両手に力を込めたその瞬間、彼女の横薙ぎの蹴りが周りの霧を巻き込むことで水の刃となって私のすぐ上を走り抜けた。

その一撃で近くにあつた街灯はいとも簡単に両断され、出店か何かだったのだろう屋台は無残に砕け散る。その光景にいやでもその威力を理解して背筋が凍る。

「動かないで、人間。貴女にはいろいろと聞かないといけないことがあるの。これから

私がする質問に正直に答えなさい。

嘘をつこうとか、逃げようなんて考えないことね。でなければ、貴女の首が飛ぶわよ」冗談を言っている様子はない。彼女に逆らえば次は自分があの街灯のようになることだろう。

素直に頷くがひとつだけ問題点がある。しかしその対策をする暇は与えてくれない。「素直なのはいいことよ。

じゃあ一つ目の質問。貴女の名前は？」

「く……く、し……」

声帯が衰えているため満足に声を出すことができない。さらにそのことに焦っているため余計に言葉が喉でつかえる。

そして、それが彼女の癩に障つたらしい。今度は威嚇ではなくこちらの身体を両断すべく足が振るわれる。

「——ひっ！」

避けることは不可能。絶対的な死が迫るのを目を固くつぶり身構えるが、いつまでたつてもその感覚はない。

恐る恐る目を開けているが自分の身体は無事だ。運良く軌道が外れたのだろうか？

しかし目の前の少女の表情は再び驚愕に目を見開いていた。

「……すり抜けた？ ホログラムか何か、いえそれなら流石に気付く。

なら幻覚の類……いや、あの人にそんな能力があるはずないわ。ならやはりこの人間は別人？」

相変わらず彼女の呟き声はほとんど聞き取ることができない。ただ彼女の様子では、さきほどの一撃はたしかに自分に直撃したらしかった。

だがそれならばなぜ自分は生きている？

不安で無意識に『彼』の右腕を強く抱きしめると、ある違和感に気付いた。少女を刺激しないよう慎重に確認すると、抱えていた右腕の手首部分が鋭利な刃物で切られたように両断されていたのだ。

落とさないようにずっと抱えていたのだからそれだけが切り裂かれるなんてことはあり得ない。

もしかして、自分の身体だけをすり抜けたというのだろうか……？

「……動揺でらしくないことをしてしまったわね。少し落ち着きましようメルトリリス。ええ、そうよ、さっきの行動は優雅じゃなかったわ。

私はもう完璧な存在。弱者相手に遅れを取ることは有り得ないわ」

自分に言い聞かせるような口調とともに自分をメルトリリスと呼んだ少女は息を整えたのち、再び最初の優雅さと嗜虐性を兼ね備えた表情でこちらに問いかける。

「あらためまして、人間。私はメルトリリス。このムーンセルの頂点に君臨するプリマドンナ。」

貴女の存在は見ているだけで私の癩に触るのだけれど、ひとまず処遇に関しては貴女の言い分を全て聞いてから考えることにするわ。

それじゃあ人間、もう一度聞くけど貴女の名前は？」

再びメルトリリスに自分の名を問われる。しかしこの短時間で声が出るはずもない。

「あ……あ……」

「……貴女、もしかして喋れないの？」

再び眉をひそめるメルトリリスだが、再び蹴りが来る前にこちらの状態に気づいてくれた。そのことに心底ホツとしながら何度も首を縦に振る。

それに対してメルトリリスはため息をつき、足元に転がっていたエネミーの片手剣をこちらに蹴り飛ばした。

「それで地面に文字を書きなさい。まさか、文字すら知らない赤子なんてことはないでしょう？」

これ以上手を煩わせるな、という視線を受けすぐさま短剣で自分の名前を彫る。

幸い自分がある場所は石畳ではなく土の上だ。文字を彫るのにそこまで苦労はなかった。

恐怖で震える手を無理やり動かし、『彼』からもらった名前を刻む。  
「櫛波……湊人？」  
くしは  
みなと

それが貴女の名前でいいのね？ 嘘偽りもなく本当に？」

首が取れそうなほど縦に振ってその問いを肯定すると、メルトリリスはホツと息を吐いた。

「それもそうよね。私のドレインは完璧なもの。それに、よく見れば髪の色も違うじゃない。他人の空似よ」

「どうやら、彼女の中で何か納得がいったらしい。何が何だか分からないが、ひとまず助かつ——」

「——なら心置きなく殺せるわね」

メルトリリスの姿が消えたかと思えば、次の瞬間には腹部に彼女の脚具の棘が深々と突き刺さっていた。

「……………え？」

いきなりのことで頭の整理が追いつかない。

なぜ名前について執拗に聞いてきたのか。

なぜいきなり攻撃してきたのか。

そして、なぜ痛みがないのか。

彼女が密着しているためよくわからないが、間違いなく彼女の棘は私の身体を貫通しているはずだ。なのに痛みというものが全く感じられない。もともと痛みを感じない体質というわけでも、死が近くなり感覚が麻痺しているという感じでもない。

それはメルトリリスも感じたらしく、驚いた様子でまじまじと突き刺した場所を見ていた。

「貴女、不思議な体質をしているのね。私が手で触れている部分はちゃんと実体があるのに、攻撃された部分だけまるで手応えがない。どういう原理かしら？」

そんなもの自分が知りたい。

そもそも自分がこんな摩訶不思議な体質なのだと今初めて知ったのだから。

「それにしても運がいいわね。本来の私ならこんな手品を使っても問答無用でドレインできたのだけれど、今の私じゃ貴女のような曖昧なものからは何も吸い取ることができないの。」

……今回は見逃してあげる。さっさと何処へでも行きなさい。私は貴女みたいなのに構っていられるほど暇じゃないの」

突き刺した棘を引き抜きわざとらしくため息をつくとき、彼女はこちらに背を向けてこの場から去ろうとする。今度こそ助かったのだ。身の安全のためにも、これ以上彼女の神経を逆なでするようなことはするべきではないだろう。



「だというのに、気付けばその腕を掴んでいた。」

どうしてそんな行動をとったのか、自分のしたことながらどうしてそうしたのかまったくわからない。ただ単純に一人になるのが嫌なだけだったかもしれないし、何か他の理由があつたのかもしれない。

少なくとも一つ言えるのは、腕を掴まれた瞬間の彼女の悲しそうな表情になぜか胸が苦しくなった。

「な、何のつもりかしら？　あまり生意気なことをしていると容赦しないわよ？」

「あな、たは……わ、私のこと、何、か……知ってるんだよ、ね？」

「っ！　知らない。貴女のことなんて知るもんですか。」

私知知っているのは……私の大切な『あの人』は、もう私の中にいるの。私と一体となつているの！

だから貴女は他人の空似。別人なのよ！」

掴まれた腕を乱暴に振りほどき、威圧するようにメルトリリスは脚具を石畳に打ち付ける。

だがこちらも引き下がるわけにはいかない理由ができた。

「わ、たしは、返し、て……もらいたいもの、が、あるの……」

でも、今の、何も覚えてない、ままじや……たぶん、見、つからない。だから……—  
—」

彼女と面と向かうのは怖い。でも逃げるわけにはいかない。

「何でもいいから、教え、て……っ！」

私は……誰と似ている、の？」

「っ!! ああそう……」

ギリつと奥歯を噛み締めたメルトリリスはどこか諦めたように、しかし嗜虐的な笑みはそのままで近づいてくる。

そして、その鋭利な脚具を振り下ろして私の手を地面に縫い止める。さっきの感覚が正しいのなら、実際は縫いとめられていないだろう。

しかし、彼女の放つ威圧感はそのことを忘れさせるには十分だった。

「なら、私についてきてもいいわよ。

ただし、貴女の間性は極限まで排除させてもらうけれど。

まず一つ目、私の方から話しかけるか、許可を出した時以外の貴女の発言を禁止します。  
す。

二つ目、私の行動、発言に対してはすべて肯定すること。反論はもちろん、そういう素ぶりをするこのも許さない。抵抗なんて論外だから。

そして三つ目——」

メルトリリスは先程破壊した露店にかけられていた布を拾い、乱雑に私の頭に被せた。

「——その顔を私に見せないで。許可なく触れることも許さないわ」

また、さっきの悲しそうな表情を見せるメルトリリス。

「……これで全部よ。それでもいいのなら私に同行することを許してあげる。

どう、何者でもない人形さん？」

喋ること、抵抗すること、顔を見せること、触れること。おおよそ考えられる彼女とのコミュニケーション手段をすべて封じられてしまった。

最初から同行など想定していないのがよくわかった。だが、迷わず首を縦に振った。

「っ、いいわ。ならついてきなさい、人形」

頷かれるとは思っていなかったのだろう。表情を変えまいと努めているが口元が引きつっているのがわかった。

それでも約束通り同行を許可してくれたのは素直に嬉しかった。

「まずはここから離れるわよ。

どうしてもこの辺りを探索しないといけないから我慢してたけれど、こんなジメジメしたところ長居したくないもの」

言うが早く、メルトリリスは跳躍して早々にこの場から離脱していった。

……私を置いて。

「……………マジですか」

さっそく約束を破ってしまったがその場にメルトリリスがいないからノーカンということにしてもらおう。

何にしてもまずは彼女に追いつかなくては話が始まらない。意識を集中させて『彼』から貰ったブレスレットで彼女の位置を突き止める。どうやらすでに一キロほど先を猛スピードで駆け抜けているらしい。

本当に容赦ないな……

そしてメルトリリスの反応とは別にこちらに近づいてくるエネミーの反応が数体知覚できた。さっきまで追いかけていたものと同種だろう。

次見つければ今度こそおしまいだ。

慌てて彼女の後を追ってこの場を後にした。

## 第二幕：明るい小川

エネミーに警戒しながらメルトリリスを追いかけること十数分。

ようやく追いついた時にはあのイギリス風の街並みから離れた辺境にたどり着いていた。

「あら、よく追いついたわね、人形。そういう類の礼装でも持ってたのかしら？」

……というか、その大切そうに抱えている右腕はなに？」

どうやら本気で引き離すつもりだったらしい。そして問いかけられたのは私の腕の中にある『彼』の右腕のこと。

……彼女から問いかけられたということは、発言してもいいと判断してよいのだろうか？ 契約を破るとどうなるのかわからないため、恐る恐る口を開く。

「ここに来る前に、私を助けてくれた人の一部、だよ」

さつき少し無理をしながらメルトリリスに懇願したことである程度声帯の衰えも改善してきたらしい。まだ少し喉に引っかかる感覚が残っているが、これなら普通のコミュニケーションができそうだ。

「死体の一部を取ってきたってことかしら？　って、いえそんなはずはないわ。」

この世界はすべてデータでできているし、ムーンセルの管理下で死ねばその肉体はムーンセルによって削除される。死体だろうと生きてる人間の身体を切断しようと、なんの処理もしていない腕だけが残るなんてことはないはず……」

「そういうわれても、現にこうして残ってるわけ、だし……」

「身体の方もそうだけど、本当に貴女謎だらけね。どうにかならないの？」

「私が一番知りたいです……」

「まあ私には関係ないことだろうし、追々わかるでしょう。」

あと、抱えていきたいのならそのままでもいいけれど、アイテムストレージに保管しておいた方が安全じゃないかしら？」

「……………あ、そっか」

「……………冗談でしょう？」

本気で呆れられてしまった。

ただこれには一応理由があるのだと弁明したい。一応アイテムストレージの存在は知っていた。ただ最初のうちは心のよりどころとして抱えておきたから使わなかっただけで、そのあとはいろいろありすぎて頭の中からぽっかり抜けていただけなのだ！

ただそれを口に出すわけにはいかない。

そこに、こちらを見下すようにメルトリリスは不敵な笑みを浮かべる。

「もしかして、ただのお間抜けさんってことでいいのかしら、人形？」

「ちが……—っ！」

反射的に浮かんだ言葉を口を塞ぐことで飲み込む。その行動にメルトリリスは少し残念そうに肩をすくめる。

「残念、私の発言を否定してくれると思ったのに。頭の回転は速いのね」

あ、危なかった……やっぱりさっきのは契約違反を誘うものだったようだ。

「あ、私の聞きたいことは聞けたし、もう喋っちゃだめよ？」

そしてすかさず発言を禁止するメルトリリス。手際が良すぎて逆に感心してしまうレベルだ。

だが、まだすべてのコミュニケーション手段が奪われたわけではない。

『彼の右腕を丁寧アイテムストレージに保管した後、見ろ、と言わんばかりにメルトリリスに突き出したスケッチブック。そこに書かれていることを見たメルトリリスは眉をひそめた。』

「『ここはどこ？』 SE. RA. PHじゃないの？』ですって？

……そういえば筆談を禁止するのを忘れてたわね」

『条件の追加は反則!!』

これ以上追加されても守る義務はないと主張する！」

「それ、私が提示した条件2の『抵抗しない』に引っかけかけてるの気づいているのかしら？」

まあいいわ。どこまで制限してもあれやこれやと私とコミュニケーションを図ろうとしてくるだろうから考えるだけ無駄なんでしょう？

筆談なら私が無視すればいいだけだし好きに書いてなさい」

ため息をつきながら筆談は了承してくれたメルトリリス。もし筆談がダメでもいろいろと別の手段は考えていたのだが、早めに彼女の方が折れてくれたのは助かった。

『それで、ここはどこのなの？ 聖杯戦争はどうなったの？』

「……………」

早速無視された！

まるで自分以外に誰もいないかのように歩いていってしまうメルトリリス。だが、こちらにも負けじとメルトリリスの前に立ち、スケッチブックを見せつける。

そんなやりとりをすること数分、突然身体がふわりと浮かび始めた。

「っ!?! っ!?!?」

それだけではない。さきほどまでは辺境とはいえちゃんとした街並みが続いていたはずなのに、突如としてグリッド線だけの空間が地平線の先まで広がっていた。



メルトリリスが何かをしたというわけではない。彼女はただ何もせずただこちらを眺めているだけだ。

ワイヤーに吊られたように不自然に浮いている私の姿を眺めて彼女は嗜虐的な笑みを浮かべている。

「てつきり叫んで今度こそ契約違反ってなると思ったのだけれど、残念ね」

『説明を！ 早く！』

「布が邪魔で恐怖に強張る表情が目ぐらいしか見えないのは残念だわ。顔全部が見えてたらこのまま眺めていても退屈しなかつたはずだもの」

『せ つ め い を は や く』

「ふふふ、聞こえないわよ人間」

「~~~~~つ!!!」

時間たつぷりこちらをいじり倒したメルトリリスは至極ご満悦でその場に腰を下ろした。

そこに椅子のようなものももちろん、身体を預けられるようなものは存在しない。しかし空気椅子のような無理をしている様子もない。

「この空間はわりと融通が効くよ。座りたいときはそうイメージすればそれに適した状態で身体が固定される。その気になれば羽ばたく白鳥のように空を飛ぶこともでき

るわ。

逆に自分の今の状態をきちんとイメージしないと無重力に放り出されたようになるの。ちょうど今の貴女みたいにね」

メルトリリスのアドバイス通りに自分の今の状態をイメージする。当たり前の状態をイメージするというのは思ったより難しく時間がかかってしまったが、それまでの態度が嘘のようにメルトリリスは気長に待つてくれた。普段は親切な性格なのだろうか？

ちゃんと二本の足で立ち、そこからメルトリリスと目線が合うようにこちらも腰を下ろす。

「思っていたより飲み込みが早いのね。慌てふためく貴女を見ているのは飽きなかったのに残念だわ」

前言撤回。この人の性格は根っこからDSだ！

「さて、この空間のことは身をもって実感したでしょうし、貴女の質問に答えていきましようか。

……その前に、SE・RA・PHという名を知っているということは、ムーンセル、ウィザード、サーヴァント、聖杯戦争……これらの単語についても知識があると見ていいわね？」

その問いに頷くとメルトリリスは一度息を吐き、間を置いてから改めて説明を再開した。

「ここは貴女の言う通りムーンセルによって作られた霊子虚構世界『S.E. R.A. P.H.』で間違いないわ。そして聖杯戦争も行われていた。

けれど、聖杯戦争は優勝者を決める前に幕を閉じたわ。この私が現れたことでね。

私は今いるこの空間とは違う場所で生まれたハイサーヴァントと呼ばれるイレギュラーな存在なのだけれど、そんなものをムーンセルは許容しない。だから本来ならこの空間に現れればムーンセルにバグとして消される運命だった。

でも私はB.B.のバツ……」

不意にメルトリリスの言葉が詰まる。まるでさきほど私が反論を飲み込んだ時のように。そして首を横に振りながら肩をすくめる。

「何でもないわ、忘れなさい。いろいろとあつて私はムーンセルからの直接干渉は受け付けないようになってるの。」

でも私がイレギュラーな存在であることには変わりないからムーンセルは聖杯戦争を一時中断し、私を消滅させることに全力を注いでいるというわけ。

そのためすでに何体かサーヴァントが刺客として送られてきたけれど、悔しそうな表情を浮かべることしかできずなす術なく私に蹂躪されていたわ」

その時の相手の表情でも思い出しているのか、恍惚の笑みで当時を語るメルトリリス。

……というか、そんな人物と一緒に行動しているというのは、もしかしくなくても自分  
はかなりヤバイことに首を突っ込んだのではなからうか？

『ひよつとして、あなたと一緒に行動している私も削除対象に入ってる？』

「あら、今更気づいたの？ まあ遠からずそうなるでしょうね」

頭が痛くなってきて思わず天を仰いだ。しかし太陽が励ましてくれることもなく、そこにはグリッド線がいつそ不自然に感じるほど存在感を放っている空だけが広がっていた。

……冷静に考えてみるとここにはオブジェクトどころか光と影という概念すら感じられず、お互いの姿だけが異様なほどはつきりと視認できている。まるで作成途中のポリゴン空間に自分やメルトリリスというアバターだけが配置されているかのようだ。

「この場所も私の影響で作られているものよ。『ムーンセルから干渉を受けない』という力が、ムーンセルの作り出した空間すら歪めているみたいね。

そして、この空間に在る限りムーンセルは内部を観測できても削除のような直接的な干渉をすることはできない。そういう空間が私を中心として展開されているみたいよ。私自身はそれを確認できないから、どこまで広がっていてどういう形状なのかというこ

とはわからないけれど」

つまり、少なくともメルトリリスについている限りは消滅させられる可能性はないということか。その代わりにこの空間から離れた瞬間消滅させられる可能性が高くなっ  
ていく気がするが……

先のこと不安になっとうなだれていると、その姿にサディストの心がくすぐられたのかメルトリリスの目が怪しく光った。

「私から離れたらどうなるのか、実験してみましようか？」

まだムーンセルの削除対象に入っていないかもしれないわよ？」

「っー」

彼女の表情は明らかによからぬことを考えている。ならば櫛波湊人という存在はすでに削除対象に入っている可能性が高まっていると考えた方がいい。そうでなくとも元々危険を承知でメルトリリスについていくと決めたのだから、ここで彼女に離れられるのは阻止しなければ……！

ただし首を振るわけにはいかない。それをすればメルトリリスに反抗したとみなされる可能性が高い。メルトリリスが実行に移さないことを祈りつつ布から覗かせた目で必死に訴えかけていると、彼女は本気で悲しそうな表情でため息をついた。

「そんな目で見ないで頂戴。調子が狂うわ。」

そこまでしてでも離れるつもりはないよね。その態度を反抗と取るべきかどうか悩ましいところだけど、今回はよしとしましょう。

……他人を自分の思うように動かすというのは思っていたのより大変なのね」

ひとまず今回は許されたらしいことにホッとした。本当にこの人は油断も隙も無い。それほどまでに私がついていくのが嫌ということなのかもしれないが。

『ところで、あなたを中心に空間がこんな風になるなら、さっきの街並みはなんだったの？』

「それについては簡単よ。ムーンセルの力だけではこの空間に干渉することはできない。

そしてこの空間での動きづらさはあなたも体験した通り。私も最初は戸惑ったけれど、今ではこっちの方が心地いいくらいよ。たとえサーヴァントを送り込んだところでこの空間内では私より優位に立つことは不可能。どんな手練れでもこの空間では等しく私の経験値に変わるだけなのよ。

さすがにムーンセルもここまではダメだと判断したのでしようね。だからまず空間を安定化させるために別のアプローチで空間を作ることにした、というところかしら。

その結果がさつき私たちがいた場所よ。あれはサーヴァントの固有結界によって作

り出された空間。ムーンセル由来の力ではないからか、私がいても空間が歪む様子はないわね」

『固有結界?』

「それは知らないのね……」

固有結界は心象風景を具現化する宝具。自分の有利なフィールドに相手を引きずりこむ大魔術、と認識しておけばおおよそ間違つてはいわね。

本来固有結界は別位相に作られるものだけど、ムーンセルは各々サーヴァントが作り出した固有結界をS.E. R.A. P.Hと同化させることで、サーヴァント側の負担を減らしつつ万全の状態で私を迎え撃つように切り替えた、つてところね。

苦肉の策にしてはよくやってる方だと思わね」

つまり、先ほどのイギリス風の風景は誰かの心象風景ということか。メルトリリスの説明と自分の経験を合わせることで大体の状況は把握することができた。

ただ気になることが一つ。

『このまま戦い続けて、あなたが助かる未来はあるの?』

ムーンセルの勝利条件はメルトリリスの討伐であり、そのためにさまざまなサーヴァントを投入しているのはわかる。だが、メルトリリスの勝利条件は何なのかわからない。

このまま終わりのない戦いを自分が倒れるまで続けるしかないのだろうか……？

しかもムーンセルがメルトリリスの能力に対策を取り始めたということは、これ以降は苦しい戦いを強いられると考えた方がいい。

だというのにメルトリリスの表情に不安は感じられない。

「たしかにムーンセルが対策を練ってきたのは予想外だったわ。でも、さつきも言ったでしょう？ これは『苦肉の策』って。

ムーンセルがサーヴァントの固有結界とS.E. R.A. P.H.を同化させたということ、その固有結界に影響があればそれはダイレクトにS.E. R.A. P.H.、果てはS.E. R.A. P.H.を作り出しているムーンセルにも影響を与える。そして私には相手の能力をドレインできる能力がある。

私の力で相手の固有結界の力を奪えば、その領地は私のもの。つまりムーンセルの一部が私のものになるのよ。

あとはそれをムーンセルを掌握できるまで繰り返し返せばいいだけ」

『何体ムーンセルがサーヴァントを配置したのかもわからないし、あんまり樂觀視できないのでは？』

「何体サーヴァントがいるのかはある程度予想できてくるわ。すでに一人始末して領域の規模は把握してるし、仮にすべてのサーヴァントがほぼ同じ規模で展開してるのならあ



と三体ぐらいでしょうね」

『でも、今私たちがいるのは固有結界の影響を受けてないところだから、そういうところもS E・R A・P Hにはまだ存在しているってことだよね？』

「たしかに固有結界と固有結界の間は数百メートルほど離れてるから、サーヴァント全員を葬ればS E・R A・P Hすべてを掌握、とはいかないでしょうね。でも、多めに見積もつても固有結界の影響がない場所は一割ほどよ。残り九割を占領できればそれぐらいどうにでもできるわ。」

さらにムーンセルはS E・R A・P Hと固有結界の同化だけで手一杯で、別枠で戦闘特化のサーヴァントを召喚する余裕もなし。

あと三体サーヴァントを葬れば晴れてムーンセルは私の物というわけ」

わからない部分もところどころあったが、それでも大まかな状態は理解することができた。

四体のサーヴァントのうち誰かがメルトリリスを討ち取ればムーンセルの勝ち。逆に全員を返り討ちにできればメルトリリスの勝ちというわけか。

さらにすでに一体にメルトリリスが白星をあげている状態ということは、メルトリリスが撃退不可能という難易度ではないことも証明済み。

決して楽な道のリではないが、可能であることは十分に理解できた。

『倒したサーヴァントってさっきのイギリスみたいな領地のサーヴァント?』

「いえ、あそこはまだ探索途中よ。」

奪った場所はここと同じ空間になるから分かりづらいけれど、もう少し進んだ先にそのサーヴァントは陣取っていたわ。

たしか剣の墓場のような固有結界を展開した赤い外装の男だったわね。

手品のように剣を生成しては使い捨てにする特殊な白兵戦と弓を使った遠距離戦の二種類を使い分ける戦い方だから苦戦したけれど、なぜか最初からある程度の対処法が頭の中に浮かんでいたのよね……」

不思議そうに首をかしげるメルトリリス。サーヴァントが存在する『座』という場所では時間という概念はない、とおぼろげにだが記憶している。つまり、過去もしくは未来、さらには別の時間軸で現界していた場合、その記憶が知識としてぼんやりと覚えている時があるらしい。

ハイサーヴァントと自称していた彼女も、もしかすると別の時間軸で召喚され、その赤い外装の男と一戦交えていたのかもしれない。

頭の中にある違和感が気になるのか思い出そうとしていたメルトリリスだが、次第に眉間にシワがよって渋い表情になる。

「……なぜでしょうね。あのスカしたドンファン顔を思い出していると無性に腹が立つ

てきたわ。

今回はシンプルに腹に膝で殺したけれど、今度会ったら出来る限り痛めつけてやろうかしら」

よし、この話をこれ以上掘り下げるのは双方に無益なようだ。

さつさと話を切り替えよう。

『残り三人のサーヴァントだけど、もう対策はできてるの？』

「まだよ。ドファン顔一人目を葬ったのはつい最近だもの。あの石畳とレンガの街並みを展開しているサーヴァントが二人目。貴女とは街の探索中にたまたま鉢合わせした、というわけよ。」

探索が難しい地形というわけではないけれど、あの霧が邪魔でなかなか探索が進まないのよね。

かといって屋上を渡り歩いても十分な情報は得られなかったし、強行突破するにしてもせめて相手の位置ぐらいは把握しないと。

何かいい方法は……」

しばし考えにふけるメルトリリス。真剣に何かを考えるその姿は、先程の嗜虐的な笑みを浮かべる彼女とまた少し違って見えて新鮮だった。そんな彼女を特に意味はなく観察していると、不意に彼女と視線が合う。

最初はこちらの視線に不快そうに眉をひそめるだけだったが、文句を言う前にハッと何かを思いついたらしい。

そして表情は再びあの嗜虐的な笑みへと変わっていく。

……ああ、これは良からぬこと考えてらっしゃる。

「ねえ、人形。敵情視察をするのに最も大事なものは、相手にこちらの素性がバレていないことだと思わない？」

甘く蕩けるような囁き声。その蠱惑的な振舞いには時と場合によつては誘惑されることもあるかもしれない。が、残念ながら今回はその時と場合ではない……！

『仰つてる意味がわかりません』

震える手で書いた文字をメルトリリスに見せると、その表情がさらに嗜虐的に歪む。しまったこれ逆効果だ！

「別に意味はくみ取らなくてもいいわ。たださっきの固有結界に戻つて、サーヴァントの情報を調べてくるだけでいいの。簡単でしょう？」

ついさつきまで散々『大変だ』と言つてからのこれである。反論禁止の条件がなければ絶対言い返していたところだろう。

『一応確認だけど、拒否——』

「拒否権はないわよっ？」

書いてるところを覗き込んでまで言葉を被せてこないでほしいです！

まあ最初から拒否できるとは思っていないなかつたので、これはただ自分の覚悟を決めるためだけに行つた儀式のようなものだ。

ただ、自分が削除対象になつていくかどうかと、固有結界の中で自分が削除されるかどうかという疑問はあらかじめ解消しておきたかつたが、それについては現地で祈りながら確認する他ないだろう。

我ながらとんでもない人と一緒に行動することになつてしまった。でも、不思議と後悔はしていない自分がいる。身の危険を感じることはあれど、どこか彼女がこちらに遠慮しているところがあるからだろうか？

「ならさっそく行つてらっしゃい。調べるのははサーヴァントの容姿と大まかな行動範囲。能力については貴女じゃ無理でしょうからそこまで高望みはしないわ。

……場合によっては期間延長も視野に入れていくから、できる限り友好に接しておきなさい。それが貴女のためにもなるわ。

合流地点は……貴女私の位置はわかるのよね？ なら頑張つて私を探しなさい。ここは動かないであげるから。

あつちにまつすぐ進めば固有結界には入れるわ」

言いながら袖で手元の隠れた腕を上げ、ある一点の方角へ指をさすメルトリリス。そ

れはありがたいのだが、親切なのか鬼畜なのかよくわからない注文がどんどん追加されていき自分の表情が引きつっているのがわかる。

しかも個人的に一番問題な部分に対して何のアドバイスも指示もない。

『エネミーに対してはどうすればいい?』

「……そんなの自分でなんとかしなさい。私はここを動かないわ」

やっぱ彼女に親切さはないね、うん。

これ以上長く居座るとそれすらも反抗行為と取られそうだ。立ち上がるイメージと共に両足に力を入れ、メルトリリスが指さした方向へと歩き出した。

## 第三幕：風変わりな店

メルトリリスの指示に従ってイギリス風の街に戻ってきたものの、指示が曖昧過ぎて早速手詰まりだった。

彼女のような機動力もないため探すとなると効率的に行う必要があるのに、その基準となる情報が少なすぎる。

この街がサーヴァントによって造られているというのであれば、シンプルに考えるとこの町にの中心部にいるんだろうか？

「まあ、そうだとしても中心部がわからないんだけどね……」

喉の方はもうほぼ復活したといってもいい。これなら普通の会話も問題なさそうかな。少し喉の奥に違和感があるが、それはここの空気が悪いせいだと思う。

……さつきより霧が濃くなった気がしないでもないけど。

『彼』からもらったブレスレットで周囲を索敵してみるが、さきほどの空間で待機しているメルトリリスの反応が索敵範囲ぎりぎりにヒットした以外は特に何も無いようだ。エネミーがいないという意味でもあるのでそれはそれでうれしいけど、これでは何も発展しない。

「……高いところの上つてみようかな」

イギリス風の街並みということで、あの有名な時計塔がないかしばらく歩いてみたがそれらしきものはない。ここがロンドンではないのか、はたまた固有結界だから正確なイギリスの街並みではないのかまではさすがにわからないが……

メルトリリスは屋上からの探索はオススメできないと言っていたが、このまま地上を闇雲に歩き回るよりはマシかもしれない。ひとまず手ごろな高さの年季の入った建物を見つけ、屋上へと向かおうとする。

そして、その行動がこの世界観の謎を紐解くきっかけとなった。

「……………」

中に入ると目の前の光景に思わず立ち止まってしまった。

そこにはなんの変哲も無いエスカレーターが設置され、一階から二階、二階から三階……と続いている。さらに天井はエスカレーターを中心に吹き抜けになっているという、よく見るショッピングモールの構造だ。特におかしいところはない。

だが、その状況自体が異常なのだ。

たしか、エスカレーターの原理がつけられたのは19世紀の中頃だが、作られたのは19世紀の終わりごろのはず。一応時期は産業革命と被ってはいるし、産業革命が終わった後もすぐにこのイギリス風の街並みが変わるとは思えない。



でもエスカレーターが発明されたのはアメリカでありイギリスではない。普及までの期間を考えても、この年季の入った建物がエスカレーターありきの構造で建造される前に導入されたとは考えにくい。

極めつけに、このエスカレーターは『蒸気機関』で稼働しているように見える。知識不足の可能性を否定しきれないが、そんなエスカレーターがあつたなど聞いたことがない。

よくわからない焦燥感に駆られ、あたりを見回す。先ほどまでは特に気にしていなかった風景でも、一つ違和感を起点に、その感覚は雪だるま式に大きくなってくる。

「……技術が発達し過ぎている?」

思わず自分の口から漏れた言葉に耳を疑つたがそうとしか思えない。いや、技術が発達しすぎてるんじゃない。風景が古すぎるんだ。

ここはまるで、蒸気機関技術がそのまま発達し続けた世界のようなだった。

不意にここが誰かの心象風景を具現化した固有結界の中だと思ひ出す。まるでSF作品の一種であるスチームパンクを再現したかのような世界を夢見たサーヴァント、そうなるはずと候補は絞れてくる。

これは思わぬところで一步前進したといえよう。あとはサーヴァントを探せば必要最低限のノルマは達成だ。

「まあ、それが一番大変そうだけど……」

念のためブレスレットで周囲を索敵してみるが、ある程度歩き進めたせいでメルトリリスの反応すらなくなってしまった。

屋上にも上ってみるが、彼女の言っていたとおり霧が濃くて何かを探すというのにはかなり不向きな環境だった。

ただ無駄だったわけではない。

屋上にたどり着いた直後は10メートル程度先を見るのがやっとだったのが、運良く霧が晴れ始めたことで視界がさつきよりも断然クリアになったのだ。

そしてこの街並みの中で一番大きく、そして煙が絶え間なく吐き出している建物を発見することができた。

かなり目を惹く建物なのにメルトリリスが探索中に見つけられなかったのは、もしかすると霧が濃すぎて隠れていたのかもしれない。

何はともあれ、目下の目標はあそこにたどり着くことになるだろう。問題はどうかやって行くかだが……

「地道に歩くしかない、よね」

人という生き物は孤独になると独り言が多くなるらしい。思考を声に出しながらも一度だけ意識をブレスレットに集中させる。

ついさつき索敵したばかりだから、変化などあるはずがない……はずだった。  
「えっ、え……え？」

一瞬何かの勘違いかと思ったが違う。正体はわからないが、高速でこちらに接近する存在を感じた。

エネミーの反応ではない。どちらかというメルトリリスのそれに近い。でも彼女自身ではない。

「とういことは……」

程なくして『それ』は上空からゆっくりと現れた。霧に包まれた街並みにさらに蒸気を排出し、ほとんど何も見えない状況だというのに嫌という程存在を放つ黒い巨体。

あたり一面真っ白な濃霧の中で目のようなものが赤く光り、こちらをまつすぐと捉えている。

目の前にして嫌でもわかる。目の前にいるのはサーヴァントだ。

そして、メルトリリスが各世界にサーヴァントは一人と言っていたということは、目の前にいるのがこの世界の主……！

「そう警戒しなくてもいい。このムーンセルに追われる者に遣わされた少女よ」

「なんで知って……っ!？」

「特に驚くことではない。この街は私の身体も同然である。であるならば、この街のこ

とは誰よりも把握していてもなんら不思議ではない」

目の前のサーヴァントらしき巨体は不自然に反響した声で語る。その様子に敵対の様子は無い。

「私がメルトリリスの指示でここを調べているって知っているのに、何もして来ないんですか？」

「無論あの少女は撃退する。私はそのためにムーンセルに呼ばれたのだからな。だが、君は違う。君は指示されてここにいただけであり、ここに直接害を及ぼすつもりはないのであろう？」

私はこの戦いに関係ないものはできる限り保護して回っている。君がよければあの少女から守ることもやぶさかではないが？」

言いながら黒い巨体がの身体が動く。よく見えないけど、おそらくこちらに手を差し伸べているのだと思う。

彼（でいいのだろうか？）の言うとおり、メルトリリスに指示されたということ以外に私がこの街に危害を加える理由はない。メルトリリスと目の前にいるサーヴァントが戦ってどちらが勝つかはわからないけど、ひとまず身の安全が保障されるのは間違いない。なくこの提案を飲むべきだと思う。

でも……

「それでも私は彼女と一緒にいたい」

「彼女の危険性は君も薄々気づいているはずだが？」

「それは、もちろん。」

身の安全を最優先に考えると、ひとまずこの案に乗っておくのが正しいってことも。でも、なぜか彼女を裏切るようなことはしたくないの。

よくわからない痛みが胸の内側を走るといふか……」

「ふむ、ならば私から言うことはない。」

あの少女に伝えるといい。『私は街の中央にある一番大きな建物で待つ』とな」

霧が濃くて姿は見えないが、目の前でこちらに背を向けたのはわかった。

見逃してくれるだけでなく、メルトリリスが求めてる情報までくれる心遣いに頭が上がない。

「ありが——」

ガシャツ、と金属同士が擦れる音に反射的に振り返る。

霧が濃くてよく見えないが、忘れない。忘れられるはずがない。ほんの数時間前に聞いたその音に全身の毛が逆立った。

——逃げないと。

そう身体に言い聞かせるも、硬直してしまった身体はそう簡単には動いてくれない。

音はすぐそこまで迫っている。もう逃げられない。

死を悟った瞬間、超重量の何かが私のすぐ上を通り過ぎた。続いて聞こえてきたのは、ベコツと金属のへしやげる音。

遅れて凄まじい風圧があたりの霧をなぎ払い、屋上一体の景色が鮮明になった。

恐る恐る目を開けると、目の前にはグシャグシャのスクラップと化したエネミーが二体ほど。

もしかと思い後ろを振り返る。まず目の前に広がったのは黒色の壁……と見間違えるほどの巨体。黒い鎧に全身を包み込み、ドリルと棍棒が組み合わさったような巨大な得物を握り、その頭部は赤い単眼が怪しげに光っている。

これって……

「ロボだこれ!？」

「ロボではない。私の固有結界を鎧として構成し直した蒸気機関である!」

なぜか私の評価が癪に障ったらしく強く否定された。

口部分から蒸気を激しく吹きながらも、エネミーへの迎撃は的確に行う鋼鉄の巨人。

しかし、このエネミーはメルトリリスを倒すために派遣されたものではなかっただろ

うか……?」

「これ、同士討ちじゃないの?」

「少し前まではたしかに同じ敵を討つ協力者ではあったが、どういうわけか数日前から所構わずNPCを襲い始めたのだ。」

以前はこの街にもNPCが普通に暮らしていたのだが、エネミーが暴走し始めてからはさつき言った巨大な建造物内で集団生活を強いられている状態だ」

原因は不明ということだが、ムーンセルによつて生み出された存在が、同じくムーンセルが生み出したNPCを襲うメリットはないはず。

もしかすると、メルトリリスがムーンセルの一部を掌握した影響が出ているのかもしれない。

「うむ、少し数が多いか。」

君をあの月の反逆者の仲間として本格的に認識したのかもしれない。

本当は君を月の反逆者の元へ送り返す予定であったが、これでは難しいだろう。

一度私の拠点へと避難するでしょう」

「え!？」

思わぬ提案に素っ頓狂な声で返す。見逃されるだけならまだしも、まさか助けてくれるとは思っていないかった。

いやまあ、すでにこうして迫るエネミーから助けてもらっているわけだが……

「驚くことでもあるまい。」





「——い、生きた心地がしなかった……」

空を飛ぶという幼いころならば誰しも夢見るだろう出来事を体験しての感想としては夢も希望もないものだったが、事実なのだから大目に見て欲しい。

そもそも、抱えられているとはいえ落下の可能性がある状態で落ちたら即終了となれば、呑気に空の旅を楽しめというほうが土台無理な話である。

荒れた息を十分な時間を使って整え、改めて自分のいる場所を確認する。

鋼鉄の巨人に連れられて降り立ったのは、先ほど何度も話題に上がった巨大な建造物の屋上であった。

随所に張り巡らされたパイプ、つぎはぎのように鉄板を重ねて増築したような壁、煙突からは際限なく水蒸気が吹き出している。

万人が想像するスチームパンクの世界そのもののような光景だった。

腕輪の力で周囲の生体反応を探知してみると、あまりの反応の多さに少し頭がくらくらしてきた。

街中のNPCを一カ所に集めたというのは本当らしい。

「ここがあなたの拠点？」

「うむ。この街の動力源でありあらゆるものの要であり、私の力が最も色濃く及ぶ場所

である。

ゆえにムーンセルの機能よりも私の力が優先され、あらゆるところで発生するエネミーもこの周辺からは発生しない」

なるほど、それが本当であればNPCも神出鬼没なエネミーの発生に怯える必要もない。

NPCをここに集めた理由がわかった気がする。

「あの、助けてもらったことは感謝してるけど、本当に私を助けてよかったの?」

「問題ない。むしろ戦闘能力のない少女をあの場合に放っておく方が私には我慢できなかったのではな」

赤く光る目を伏せ気味に鋼鉄の巨人は口から少し蒸気を吐いた。ため息の代わりにどうするか?

何にせよ、目の前にいるこのサーヴァントは非常に紳士的な性格であることは十分に分かった。

ならばここは謝罪より感謝するほうが相手のためかな。

「ありがとう。えつと……そういえばあなたの名前は? 私は櫛波湊人」

「……ふむ、本来真名は語るべきではないのだろうが、相手に名乗られたのであればこちらも返すのが礼儀であるな」

鋼鉄の巨体がゆっくりとこちらに振り返る。

「私の名はチャールズ・バベツジ。ひとたび死して空想世界として共にある蒸気王である」

チャールズ・バベツジ……

その名前は聞いたことがある。そして、このスチームパンクの世界にようやく合点がいった。

数学者であり機械設計者。

蒸気機関を使った「階差機関」「解析機関」を考案し、しかしオーバーテクノロジーゆえに完成せず果てた天才。

記憶が正しければ、現在の技術をもつてしても未だに階差機関の一部しか再現が出来ていないほどだとか。

『コンピュータの父』とまで称される彼が、まさかサーヴァントとして現界する際このような姿になっているとは思いもしなかった。

「さて、このまま屋上にいれば飛行型のエネミーが再び襲ってくる可能性もある。ひとまず中に入ったほうがいい。

それから、君が今日休む部屋を用意しよう」

「え!? そんな、助けてもらったただけでも十分なのに部屋なんて……っ」

屋上から移動しようとする巨人改めバベツジを慌てて追いかけようとするも、急に視界がぐらつき膝から力が抜けた。

「——その身体ではエネミーの索敵をかくぐり外の世界へ行くのは不可能であろう」顔から床にダイブする直前、滑るように移動して来たバベツジに抱えられる。

思い返せば、あの謎の空間で男とも女ともとれる不思議な『彼』に出会ってからたぶん一日も経っていない。

気が休まる暇もなかったから忘れていたけど、かなりのハードスケジュールだ。

表裏なしの親切で言っているだろう彼の提案を無下にするのもなんだか悪い気がするし、素直に行為に甘えさせてもらおう。

「じゃ、じゃあお願い……」

「うむ、承知した」

言うが早くバベツジは私を頭に乘せて、滑るように屋上を移動していく。

……たしかに彼のゴツゴツとした巨体の中で、一番安定するのは円柱状になっている頭頂部だとは思うのだが、ここに人を乗せて問題ないのだろうか……？ まあ問題ないのだろう。

それにしても、普段と違う目線の高さというのは新鮮だった。

そして壁際にあった巨大なコンテナのような物の中に入ると、ゆっくりと扉が閉まり

始めた。

閉じ込められるかと一瞬警戒したのもつかの間、続いて軽い振動、そして次に僅かな浮遊感と、これがエレベーターで降下中なのだど理解した。

当時の人力を使わないエレベーターは技術的にはかなり荒削りで安全装置などもなかったと聞くけど、たぶんそれはこの世界には適応されない。その証拠に滑らかに速度を上げつつ降下していく。

エレベーターの広さはコンテナと見間違うほどだけど、高さはバベツジの身長に合わせているのか、彼の頭に乗ったままだとかかなり圧迫感があった。

それを察したのか、少しだけ蒸気を排出しながらバベツジは申し訳なさそうに語る。「狭いと思うがしばらく我慢してほしい。

今の私よりも巨体の生物はそうそういないため、高さはギリギリで設計してしまったのだ。

もし狭ければ、もう一度抱えるのでも構わないが？」  
「あ、いや大丈夫だよ？」

低いといつても人一人分のスペースなら十分ある。

あと、ロボみたいな体格をしている人の頭に乗るなどそうそうできる体験でないの  
で、ここぞとばかりに堪能しておきたいと思ってみたり……

「バベツジ専用ってことはパイプとかの修繕のためとか？」

「否、配管の方は問題ないが、屋上からエネミーが攻めて来た際に私や警備部隊が屋上に向かう際に使っているのだ」

警備部隊？ と尋ねようとしたところでエレベーターが緩やかに速度を落としはじめ、停止した。

「……わあ」

ゴリゴリと金属同士が擦れる音を立てながら扉が開くと、目の前の光景に思わず声が漏れた。

蒸気が伝うパイプとつぎはぎの壁だけで構成された牢獄のような空間。

そこに所狭しと、バベツジよりは小さいが彼に似た大きさまざま機械が隊列を組んで待機していた。

「ヘルタースケルター」。

私の肉体を解析し、量産用に改良したこの世界の警備部隊である！」

「へ、へえ……」

私から尋ねる前にバベツジは自ら目の前の機械の説明をする。心なしか胸を張り、自分の成果物を自信満々に披露する子供のようにはテンションが上がっている気がする。

けど、たしかヘルタースケルターとは『慌てふためいて』や『混乱している』のよう

な意味だった気が……

警備部隊にそんな名前をつけていいのかどうか？

「まあ、本人が満足そうならいいのかな……」

「ここにいるのは非常事態に備えて待機させてあるもので、稼働中のものはこの建物の入口など各所に常駐させてある。

ランダム出現程度のエネミーであれば建物に入る前に容易に撃退できるだろう」

試しにブレスレットの力で確認してみると、たしかに目の前にいる反応と同じものが建物内でたくさん徘徊しているみたいだ。

「ここをまっすぐ抜けた先にあるエレベーターが居住区へと繋がっている。

部屋はもう用意させてあるからゆっくり休むと——」

ヘルタースケルターに囲まれた通路を抜けている途中、突然警報が鳴り始めた。

「な、何!？」

「警備システムが作動したらしい。

……私である。状況は？」

落ちていた様子でバベッジは最寄りの壁に備え付けられていたボタンを押し、どこかと連絡を取り始める。

『上空から15体ほど攻勢エネミーがこちらへ侵攻しています。』

地上からの侵攻は確認できません』

「……………ふむ、了解した。」

ではマニュアル通り、君達は自室で待機しておきなさい」

『わかりました』

通信が切れ、少し間があつてからバベッジの赤い瞳が閉じられ、小さく蒸気を排出する。

会つて間もないが、彼の表情のパターンは非常にわかりやすい。

そして少し間があつてから、頭の上に乗っている私を下ろしながら状況を説明してくれる。

「どうやらエネミーの襲撃のようだ」

「もしかして、私のせい?」

「なんとも言えない。このような小規模の襲撃は一日に最低一回はあるのでな。」

私はここにあるヘルタースケルターとともに屋上へ迎撃に向かう。

代わりに小型のヘルタースケルターを君の案内役兼護衛にするのでそれで許してほしい」

「大丈夫だから心配しないで。」

むしろここままでしてもらつて、こつちがお礼を言うべきなのに」



「承知した。迎撃が終わり次第、一度君の部屋に伺う予定だ」

その言葉を最後にバベツジは振り返り、屋上へと続くエレベーターへ向かう。

そしてその後を追うように、待機状態だったヘルタースケルターのうち比較的大型のものが起動して動き始めた。

十数体ほどの、私よりも大きな機械たちが隊列を組んで移動する光景は小規模とは言え圧巻の一言だ。

そしてバベツジと同じようにエレベーターへ乗り込むと、硬いものが擦れる音とともに扉が閉まった。

その光景を見送ったのに、私の服の裾を控えめに引つ張る影が一つ。

見れば先程バベツジとともにエレベーターへと向かったのは別の、一番小さいヘルタースケルターだった。

「君がバベツジの言つてた案内役？」

少し腰を落として目線を合わせながら尋ねると、その言葉に目の前のヘルタースケルターは首部分のモーターを駆動させて何度も頷く。

……見た目が私よりも小さいのも相まって不覚にも可愛いと思つてしまった。

「じゃあよろしくね」

もう一度大きく頷いた小さいヘルタースケルターは勢いよく振り返つ……たかと思

えば、少し勢いがつきすぎたのか一回転してもう一度私と向かい合う形になった。

「えっと、大丈夫？」

思わず心配になるが改めて振り返ると、今度は問題なく居住区へと続くエレベーターへと移動していく。

「……やっぱりかわいい」

わざとなのか偶然なのか、全ての個体共通なのかあの個体だけおかしなのか、これだけではよくわからないけど、保護欲をくすぐるあの挙動は反則だと思う。

どうにかバベツジにお願いして、心の癒し要員として一体ぐらい貰えないだろうか

……